

田村・高木組 全十勝 剣道連盟 準V



(左から) 四段の部で準優勝を飾った田村浩志・高木誠組、三段の部優秀賞の山本直人・高木万里子組

全日本杖道 四段の部 集大成「ミス無く」

杖道(じょうどう)の第44回全日本大会(10月8日・東京武道館)全日本剣道連盟主催)の四段の部に出場した全十勝剣道連盟杖道部会(鈴木清志部会長)の田村浩志(58)・高木誠(43)組が準優勝を挙げた。また、三段の部では高木万里子(51)と山本直人(30)の母子ペアが最高位となる優秀賞を獲得した。

三段の部 高木・山本母子が最高位

杖道 2人一組の形武道。長さ4尺2寸1分(128センチ)、直径8分(2.4センチ)の白カシの杖を使用。1人が太刀で攻撃し、杖を持ったもう1人がかわしてみぞおちなど相手の急所を狙う。2組の出場者が3人の審判員の前で6本の演技を行って競う。3本で役割を交代し、姿勢、氣勢、打突、技の充実度などで旗判定を受ける。

「できることは全て出し切り、ノーマスだった。田村は優勝を逃した悔しさよりも、達成感をにじませた。高木と組んでの出場はベスト8だった昨年に次いで2回目。五段への昇段を



形稽古に打ち込む高木誠(右)と田村浩志(左)

控えた田村にとって今回は四段として集大成となる全日本だった。厳しい戦いが続いた。初戦の2回戦を2-1で辛勝。3回戦は3-0で勝つたものの、4回戦は2-1。準決勝がヤマ場だった。同じ十勝の仲間で前年覇者の高井宏行(50)・三戸部長太(34)組と対戦。田村は「遠慮せず、勝つてもおごらず、負けても腐らず」と臨み、2-1で競り勝った。相手に杖から手が離れるというミスがあったため、高木は「1つのミスが致命傷となる。ミスなくやること」が最低限」と杖道の難しさ、奥深さを感じ取った。決勝の相手は札幌の浅井

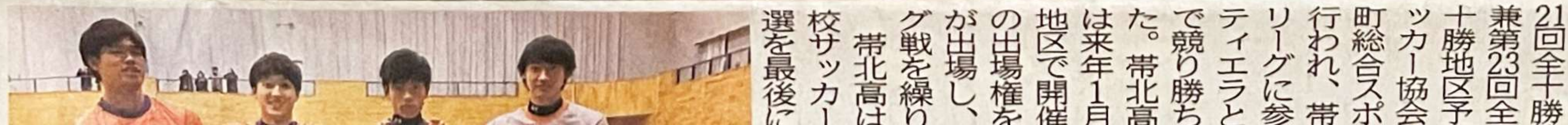
康孝・細沼哲也組。田村は浅井と、高木は細沼と組んだこともあり、同じ北海道勢として切磋琢磨(せつさたくま)してきた。0-3で敗れたが、「ベスト4に道内勢が3組も入った。レベルの高さを示すことができたのでは」と田村は満足そうに振り返る。高木も「稽古を通して呼吸を合わせ、いいところ、悪いところを指摘し合って修正してきた。2年目のコンビにしてはいい結果」と笑顔を見せた。

高木の妻万里子と山本の母子は初段のときと昨年もペアを組んだが、ともにベスト4だった。今回3度目で優勝に相当する優秀賞に輝いた。万里子は四段昇格を控えており、山本と組んでの三段挑戦は今回が最後。山本は「母に優秀賞を取ってもらい、悔いを残さず上についてもらいたかった」と親孝行を果たした。万里子は初戦の2回戦で急に緊張に襲われた。昨年の初戦で山本の顔を杖でたたいてけがをさせてしまったことが頭をよぎった。体が思うように動かず「負けたと思った」というが、3-0で勝つと、吹っ切れた。3回戦は昨年の準決勝で敗れた神奈川の夫婦ペア。「負けたくない」とより丁寧さを心掛け、2-1で撃破。万里子は「自信が戻ってきた」と4回戦を3-0で突破し、最後の準決勝も2-1で勝った。山本は「声がでて、しっかりと技も決まった」と胸を張る。万里子は「(昇段によって)次は夫に組んでもらえるよう修行に励みたい。また、息子が上がってきたときにも組めることが楽しみ」と意欲を新たにしている。同杖道部会では会員の募集している。田村は「年齢や性別、剣道など武道の経験の有無に関係なく取り組むことができる」と呼び掛ける。問い合わせは事務局の三戸部さん(090・9756・3840)へ。

(大野篤志)

帯北 全

【浦幌】



帯農 団体14連覇

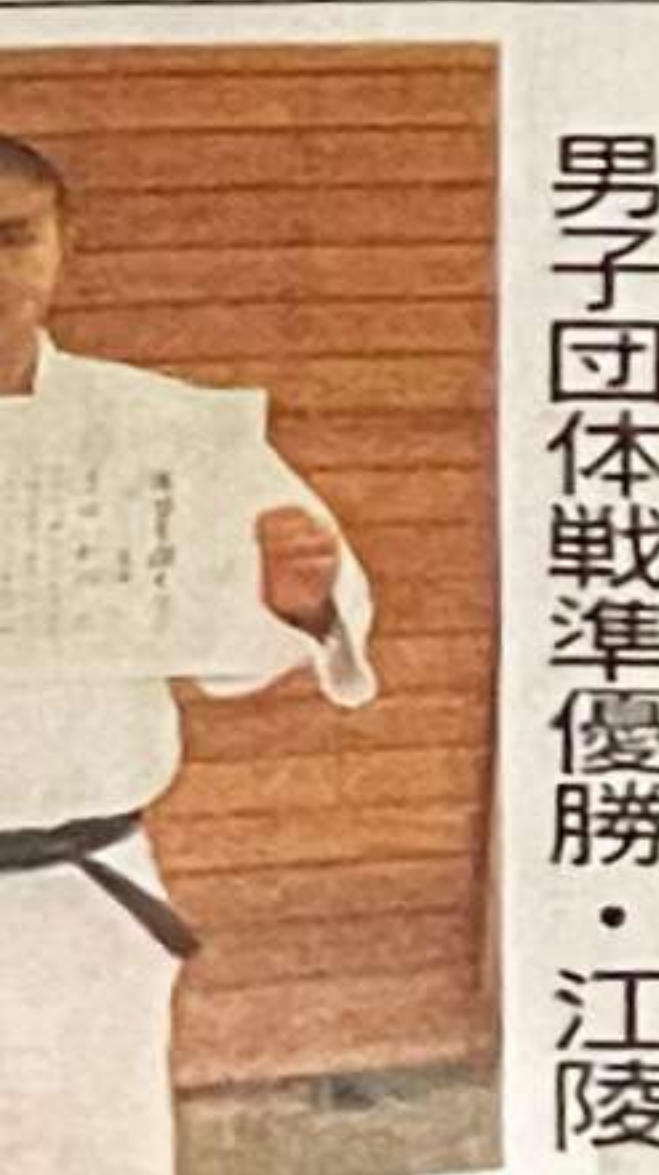
全国高校個人も岡元が活躍

柔道の第40回全国高校選手権十勝支部大会(十勝柔道連盟、道高体連十勝支部主催)が12日、帯広の森体育館で行われた。男子団体戦決勝で帯農(浦十夢・2

男子団体戦の上位3校は道大会(12月22、23日・札幌市)に出場する。(折原徹也)



目標は全道一



決勝は、自分が出せず、男子団体戦準優勝・江陵

